

生死を賭けた烈語

柴田勝家

一龍斎貞花

講談師

京へ上洛するには近江の国を通らなければならない。織田信長は、そのためにはまず、佐々木ろっかくにろうどうしやうてい六角入道承禎を倒さんものと、4万の軍勢を率いて岐阜を出陣。

観音寺城をはじめ、18の出城を次々と落城。承禎なんとしても近江を取り返そうと軍を立て直し、まず第1番に長光寺の城に3千余騎をもって一気に攻め落とさんものと軍勢を率いる。

この城を守るは織田家の元老・柴田ごん権六勝家。その勢わずか300余人。流石は“鬼”とうたわれし勝家、少しも驚かず、城門押し開き渦巻く敵中へおど躍り入り、おお大十字の槍を振るって荒れ廻り佐々木の大军を追い払った。

「されば」と佐々木は、勝手知ったる長光寺の城。城中に井戸がないことを利用し、城への水を断ってしまった。時は6月のはじめ、旧暦ですから土用も近いと

いう季節、苦しさは必定ともくろんだ佐々木勢だが、柴田軍相変らず勇猛に戦い、城はなかなか落ちません。

「城内はすでに水に窮し困り切っておるはずだが、いっこうにその様子が見えん、その方使者として参り、ひそかに水の有無を調べて参れ」「ハッ」よく気がつく平井甚助を使者として勝家の元へ、まず降参をうながしたが、もとより勝家、即座に断る。

「それは残念」と、次の間へ下がった甚助、そこにいた小姓に、

「あまりの暑さにいささか閉口致した、何とぞ手水の水を所望したい」

水の無いのがわかっているのに、どうせ小さな金盥かなだらひにでも入れて持ってくるだろうと思っていると、大きな器へなみなみと入れ、2人掛りで運んできて「どうぞお使い下さい」甚助手拭をひたして顔から襟をぬぐい「頂戴致した」大切な水、そのまま持っていくだろうと見ていると、庭へザブリと捨てた。玄関へ出ると、大勢の家来が大きな桶になみなみと水を入れ

「庭が乾くと暑くていかん、どんどんまけ」

ザブリザブリと打ち水をしている。

驚いた甚助飛んで帰り、その有様をすぐに報告。「ハテ、不思議」と一同。

もとより城内に水があるわけがないが、勝家もさるもの、城内の水の様子を調べに来たものと見破り、水をふんだんに使っ

てみせ、惑乱したのである。

織田方では攻め落とした諸城を、佐久間、森、中川、稲葉の面々が守っているが、いずれも佐々木方の一揆のため、長光寺の勝家の救援に向かうことが出来ない。貯えの水も少なくなり、ぐずぐずしていたら干上がってしまう。勝家は、わずかに残った水甕みずがめを残らず庭へ運ばせ、家来一同を集めた。

水は土に還かえったぞ

我らも土に、還るまでじゃ

「水を断たれながら大軍を向こうによく戦ってくれた。この上は渴き死か、敵陣へ切り入って討ち死にするか二つに一つ。この水を思うままに飲んで渴きをとめるがよい。火矢を防ぐ不時の用意にと貯えし水も不要となった。我と生死をともにするも、敵に降くだるも皆の自由じゃ」

この言葉に、柴田源左衛門、同じく新左衛門、拝郷五左衛門、井上久八等言葉を揃え

「討ち死にせんことこそ武士の面目にござる」

「力の限り働きましょう」

「さればこの水、飲みたいだけ飲むがよい」

いずれも心ゆくばかり水を飲み、元気回復。残った水を馬にやれば馬も勇んで「ヒヒーン」と、高いいななく。

「方々かたがた、水は十分に飲んだか。ただいまより討って出で斬り死するか、武勇めで

たく敵方の水を飲むか、いずれにしてもこの甕に用はない」

薙刀なぎなたの石突いしづきで「デイト、デイト」と、次々と水甕を突けば、甕は割れ、水がどっと流れ出る。

「水は土に還ったぞ、我らも土に還るまでじゃ、一人でも多くの敵を討ち取って冥土の土産にしようぞ、いざ出陣じゃ」
「おーう！」

大手の門を八文字に開き、どっとばかりに敵陣へ、一方、佐々木方とはといえば油断していたからたまらない。3千の大軍を切り崩された佐々木の軍勢、逃げまどうばかり、ついに近江の国に名家を誇った佐々木家も滅びたのでございます。

柴田勝家は、信長が家督を相続した時にはすでに織田家の重臣であり、信長の弟の信行に家老として仕え、信行を織田家の後継者とすべく信長と戦うが、敗れてからは信長を認め、信長に仕える。

信長死後織田家の後継者をめぐり秀吉と対立、賤ヶ岳の戦いで敗れ、越前北ノ庄にてお市の方共に自害。来年の大河ドラマ「お江」の義父である。

兵たちに決死の心を高揚させた勝家。企業が窮地におちいった時、トップは沈着冷静に部下の心を高揚させることが出来るかどうか。企業の存続トップの言動が重要である。